

《2009年8月例会報告》

【日 時】2009年7月28日（火）15：00～21：00（その後、川崎駅付近の沖縄料理屋へ。23：30頃まで）

【会 場】川崎競馬場来賓室（神奈川県川崎市川崎区富士見1丁目5番1号）

【テーマ】サッカー文化と競馬文化の微妙な関係 ～川崎競馬場を丸ごと体験！～

【コーディネーター】茅野英一（神奈川県川崎競馬組合事務局長）

【参加者（会員）13名】麻生征宏（学研） 阿部博一（日本サッカー史研究会） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー） 国島栄市（ビバ！サッカー） 嶋崎雅規（帝京中高） 鈴木崇正（NECデザイン&プロモーション） 高橋義雄（筑波大学） 田中理恵（会社員） 茅野英一（神奈川県川崎競馬組合事務局長） 中塚義実（筑波大学附属高校） 松下徹（大原簿記学校） 依藤正次（ヨココム）
他1名

【大まかな流れ】

15：00 川崎競馬第1入場門前集合・入場

- ・入場してすぐ、北海道・門別競馬場の「スクランブルナイト記念プレゼント」で、ほぼ全員エコバッグが当たる！ ここで“運”を使い果たした(?)
- ・馬場脇へ移動してスタート地点付近を見学。茅野さんの解説がありがたい

15：30 第1レースをスタート地点付近で見学。大迫力！

- ・その後、3号スタンド（もともとあったところで風情あり）の前を通過して、2号スタンド（ガラス張り）との間から第2入場門側へ。さらに進んでパドック周辺の見学。ここでも茅野さんの解説がありがたい。
- ・関係者入場口から1号スタンドに入り、5階へ。

16：00前 特別貴賓室A1入室（ゴールがほぼ真下に見えるベストポジション）

- ・茅野さんによる川崎競馬および競馬文化の解説（約1時間） → 次ページ以降に報告掲載

17：00 第4レース。これ以降、それぞれが競馬と競馬場を楽しむ

- ・競馬場の中は芝生広場。地元住民がビニールシートを広げてピクニック気分で楽しんでいる。ここでサッカーできればいいのだが…
- ・場内は「B級グルメ」の宝庫。特にコロケの味は忘れられない
- ・30分ごとに訪れる投票とレースと配当確認のサイクルが、スピード感があってよい
- ・合間に門別競馬の投票も可能。これもまたよい
- ・世界最大の「キングビジョン」は大迫力。門別競馬の様子も映し出される。

20：50 第11レース（最終）スタート

21：30前 お開き → 都合のつく方々で川崎駅前にて懇親会

（ここまで文責・中塚義実）

サッカー文化と競馬文化の微妙な関係

～川崎競馬場を丸ごと体験！～

<目次>

1. 川崎競馬場の施設
2. 川崎競馬場の沿革
3. 川崎競馬場の現在の取り組み
4. 参加者のコメント

1. 川崎競馬場の施設

茅野：パンフレットを3つ持ってきました。「そうだ川崎競馬に行こう」というパンフレットをご覧ください。交通案内が載っています。京急港町駅から徒歩1分です。川崎駅からは徒歩12分、JRから徒歩15分ということで、政令市のメインの駅から歩いて来られるのはここだけです。

東京大井が「シティ競馬」と言っていますが、大森からバスですし、立会川から歩いて15分ということで、東京府中競馬も専用通路をずっと通って行きますし、駅から一番近い競馬場は川崎競馬場だと思っています。

帰りは、第2入場門を出て宮前交差点、それからJRの交差点まで15分。この道路を歩いてすぐ向こう側が、有名な堀の内です。今日は、第一入場門から入ってもらって、先ほど1,400mのスタート地点を見ていただきました。2号スタンドと3号スタンドの間を通過して、1号スタンドのパドックの所を通過して開催事務のところで上に上がってきました。この部屋はA1の部屋です。真ん中にこんな芝生があります。芝生の広場が競馬場のど真ん中にあるのが、川崎競馬の特徴です。

一同：この芝生いいねー

茅野：サラリーマンとか近所のお仲間がブルーシートをもってきて宴会を始めて、花見の時の上野公園状態になります。

中塚：ここでサッカーやってもいいんですか？

一同：笑。

茅野：ここでボール遊びをするとガードマンが飛んできて、止められてしまいます。子供がやっても止められます。間違えてコースにボールが入っちゃって、馬が暴れると大変な事故になります。2年前に他の競馬場で死亡事故が1件ありました。騎手は、当然ですが事故には大変神経を使っていて、彼らの言葉を借りると、「2mの高さで時速70kmで走っているのだ。それで砂にたたきつけられる」。われわれが見ていても、プロテクターを着けているといっても薄っぺらなアルミのチップの入っているプロテクターで、馬に蹴られたら、えぐられることはないけど、何本か肋骨が折れる

でしょう。ヘルメットはペラペラですね。ヘルメットをつけたとしても頸椎からやられちゃいます。だから落馬事故があったら、私もこの場からでも飛んで行って救急車を呼ぶことになります。救急車に乗せるまでの担当になっていて、ネックボード、バックボードをつけて完全固定してからうちから出て行ってもらうようにします。

あっ、今のレースは閉め切りました。

今日はみなさんがくる日なので、10レースを11レースにしてあります（笑）。冗談です。

一同：笑

2. 川崎競馬場の沿革

茅野：あと9レース楽しめます。こんな話ばかりしていると怒られちゃうので、簡単に沿革を。

基本的に、戦前の神奈川県には各地に畑競馬場があったそうです。畑競馬場っていうのは「畑」の「ハタ」で、昔、お祭りがあつたりすると農耕馬を連れてきて、そこらの畑に走路を作って、そこを走らせて、当たった人には野菜の商品だとかお米の商品を出すという「畑競馬」と呼ばれるものが、県下各地にありました。

昭和23年に競馬法が制定されて、戦後復興財源にしようということで、今まで自由にローカルで行われていた各地の畑競馬を公設の競馬に切り替える措置をとりました。各地の畑競馬を、神奈川県は戸塚に集約させました。県営の戸塚競馬場をつくったのが県営競馬の始まりです。その当時は、神奈川県の各地から、1頭や2頭をひいた調教師兼騎手兼厩務員のおじさんが、朝から馬をつないで来てエイヤーと走らせて、勝ったら賞金をもらってまた連れて帰るという状態でした。競馬の許可が出たのは戦災の被害がひどいところで、戦災復興支援のためにということでした。

しかし実際のところ、そのあとの戦後復興の中、京浜工業地帯で3交代制で働いている労働者たちの遊び場がないわけです。帰ったって寮の4人部屋、6人部屋となる。そんなところにもしよがない。映画見に行ってもせいぜい1本や2本。夜勤だと昼間は休みです。行くところがないっていう流れができて、競馬場にくるお客さんが3万人、4万人となりました。

当時は電算機がないので、単勝と複勝の窓口は、窓口1番、2番、3番、4番と番号がふってあって、1番の馬券を買いたいときに、その1番の窓口で金をいれて手をつっこむ。そうするとおばちゃんが馬券をくれる。そういうやり方です。ですからその当時の職員が一番重要なやり方は、何が一番売れるかっていうのを見極めて、その窓口を増やすことですね。1号馬が一番人気になるとしたらその窓口を5つにしておく。そんな操作をやりながら馬券を売っていました。

そういう時代を過ぎまして、昭和25年に川崎へ移転します。当時神奈川県の財政状況が非常に悪く、昭和32年に一括して現在のよみうりランド（当時は「関東レースクラブ」）に全部売却しました。それ以来、ここはよみうりランドの持ち物で、我々はよみうりランドに数億払って運営しています。大井も東京サマーランドを運営している会社が持っています。船橋はわれわれと同じよみうりランドです。大概の地方競馬は自分で持ってやっていますが、戦後すぐの神奈川県などの金がない時代なごりとして売ってしまっていて、その後は、当時売った値段に相当する値段を借り賃として毎年払っています。

さっき神奈川県が開催したと言いましたが、開催許可は農林水産省（当時は農林省）の開催許可権です。開催許可権の基本は、年に何回開催していいかという許可です。われわれ神奈川県は、農林水産省からの10開催権をもらっています。1開催は6日まで、1日のレースは12レースまでと定められています。競馬場のある都市は迷惑がかかるだろうということで、開催権をもらっています。川崎市も5開催権を持っています。かつては神奈川県経営10開催、川崎市営5開催、都合15開

催やっていました。ところがバブル崩壊で経営状況が極めて悪くなってきました。さっきも言いましたように、京浜工業地帯の三交代の労働者に来てもらって、楽で大きな商売ができなくなってきました。映画館もある、サッカーもある、というように他にも楽しみがいっぱいある。レジャーは他にもいっぱいあるということになってきて、お金を使わなくなりました。バブルのときは、バブリーな人がお金をいっぱい使ってくれましたけど、もうそれもなくなってくる。

そうすると経営の合理化をはからなければならない。そこで最初にやったことが、平成12年ですが、地方自治体同士で一つの事業部門だけの、もう一つの自治体をつくる。これを「一部事務組合」と呼んでいます。1町1村で持っても持ちきれないので、一つのゴミ焼却場を5つの自治体で使うということや、消防が、たとえば5町で一つの消防本部をつくる、こういったものが一部事務組合です。ここも県と川崎で一部事務組合をつくりました。

開催のベースが開催権ですので、県が10開催権、川崎が5開催権。これは持ち分割合で、基本的には2：1の持ち分割合で、神奈川県川崎競馬組合という一部組合をつくっています。首長にあたる管理者の他に、監査委員もいれば議会もあります。議会の議員も6人いまして、2：1の割合で、県議会から4人、市議会議員から2人来て、年に3回くらいここで議会を開いて、この一部事務組合で適用する条例を審議します。この組合の条例でこの組合の運営方法を定められていますので、いちいち県庁や川崎市に協議をすることもなく、予算案とか決算案とかも含めてこの組合議会で審議でき、組合独自で執行することができます。その点できわめて効率的な運営ができるようになり、競馬場の運営の効率化、円滑化を図ることができました。

その結果、一時36億円まで膨らんだ累積赤字が大幅に減りました。そこまで赤字が行ったときには広告経費をすべて0にする、それから電気は蛍光灯を抜いちゃうところまで追い込まれたんですが、そうしたいろんな細かい努力を積み重ねたほか、大きな経営改善をしました。

一つは従事員さん、臨時従事員さんについてですが、かつて賃金は1日1万3千円くらい払われていました。そんなことをしていたらこの競馬場がつぶれちゃうってことで、世間なりの8,000円台に抑えました。それをするために全員を一度解雇して、新しい賃金で再雇用をする。そのために14億円の借金をして、臨時餞別金という形で退職金を払うという荒療治をしました。

二つ目には、ここのよみうりランドからの借り上げ料も大幅に引き下げた。三つ目には、競争馬が勝つと賞金が出ていますが、その額も大幅に引き下げて約1億5千万ほど経費を節減している。その結果、いまだに馬主から注文が絶えません。走らせても走らせても儲からないといわれている。

馬1頭を預けているだけで、川崎ですと1ヶ月に25万から30万くらいかかるといわれていて、中央競馬だと60万くらいかかるといわれています。馬の値段は川崎ですと100万円から500万円くらいが中心で、車1台買う気になれば馬は買えます。中央競馬だと、馬主になるには資産が9千万円以上、年収が2年連続1,800万円以上と、審査基準がものすごく厳しいですが、地方競馬の馬主の条件は年収500万円以上でOKなので、たいがいの人はなれます。問題は月々の馬の預託料の支払が30万円くらいになりますが、これは馬に稼いでもらいます。南関東競馬の場合、レースに出ると、出るだけでおおよそ十数万円くらい払われます。だから月に3レース出るとそれだけで多少は儲かるのですが、さすがに月に3レースまでは走れないし、3レース月に走っちゃうと、まず馬が故障してしまいます。だいたい馬の調子が良くて月に2レースぐらいで、そのうちの1レースの勝ちが回ってくるようにすれば、馬が自分の飼料代くらいは稼いでくれる状態になります。こうなると馬主の経済はなんとか成り立つのですが、最初に初期投資した馬の値段が5千万円の馬、あるいは1億円の馬ということになりますと、その分まで稼げるかということになりますと、本当のスター馬でなければなりません。Jリーガーを育てるとかゴールドメダリストを育てるとかということと同じことで、それはなかなか難しいです。

地方競馬と中央競馬では賞金体系体制が全く違います。馬は中央競馬か地方競馬かどちらかをどう選ぶのかという質問についてですが、最初にかかるインシヤルコスト、馬の値段が何百万かなら

地方競馬の賞金体系でも元がとれるかなど。5千万、1億円の馬を地方競馬で元をとるというのはなかなか難しい。その年の代表馬クラスにでもならない限りなかなか元が取れませんので、中央競馬にいきます。そしてもし、中央でだめなら地方競馬に移って賞金を稼ぎ、だめでも飼葉代だけでも稼ごうとします。それもだめだったということになると、乗馬になるか、お肉になるか、処分されるかです。

馬というのはヒトで言うと中指1本で立ってます。ヒトの膝関節に見えるのが手首の関節で、ひじ関節は体の中に入っています。中指だけで立っているのです、ここが折れたりするともう支えられません。基本的に、折れた場合はそこで処分します。昔、テンポイント事件というのがありましたが、名馬で人気があり、処分するのが可哀想、なんとか治療しよう、立てるようにと釣っていたら、そこに褥瘡（じょくそう）ができて、結局苦しむ期間を6ヶ月伸ばしただけということになってしまいました。今ではファンも騒がないです。静かに薬殺させます。ただここ（競馬場）で薬殺させるかは馬主さんとの相談もあるので、1回厩舎に戻ってから薬殺させるかという判断はあります。

川崎競馬では、平均すると1日10レースあります。今日は3日間開催で11レースなのですが、50レースやって10頭平均ですから、だいたい500頭走ります。そうすると、時によっては2頭か3頭が薬殺されてしまいます。馬を買って、強くなくても乗馬になるとかお肉になるところまで走る可能性もありますけど、買ってすぐに調教中に事故で死んじゃうとか、最初のレースで死んじゃうという場合もありますので、馬券を買うよりも馬主になる方がもっと博打（ばくち）です。それだから逆に当たった時は大きいです。ある馬主さんは、馬1頭を買いに行ったら、もう1頭、これは牝馬（ひんば）だからただでいいから持って行ってくれと言われて持ち帰ったら、ただでもらってきた牝馬の方が調子が良くて、500万円で買ってきた方の馬を輸送費やそれまでの飼葉代も込みで400万円で売ってしまって牝馬だけ残した。そうしたらその馬が1,000万も稼いで。馬の見極めは難しいです。どこかの調教師が言っていたのですが、「いい馬がわかりますか」と尋ねたら、「わかってたら調教師になってねえ、馬主やっている」と答えたというぐらい難しいです。

あとは執務体制ですけど、一部事務組合は、常勤職員は28人で運営しています。普段は総務課、企画振興課、渉外労務課、競走課、厩舎管理課といった体制で、全体の経営、運営をどう考えるか、どんなレースを組んでいくか、どういうところに売り上げを持っていくかということなど、全体の管理をやっています。競馬開催の時には、臨時体制で開催執務体制というものを同じメンバーで組みます。開催執務委員長というのがこのボスになりまして、わたくしは副委員長です。その下に総務委員、採決委員、番組編成委員、馬場管理委員、発走委員、決勝審判委員、検量委員、場内取締委員、獣医委員、投票委員、こういったそれぞれがみんなセクションに分かれて、その下に200名くらいの従事員と南関東4場が共同で組合をつくってしまっていて、そこで雇っている従事員80人くらい、ガードマン130人くらい、全部で300人から400人くらいの体制をつくって、28名が分担してコントロールしています。

それとSPAT4と言って、南関東4場でインターネット投票システムを作っています。この他にも、楽天とかソフトバンクも独自のシステムを持っています。また、4階の特別観覧席などは、今まで場内でその日だけ売っていたんですが、CNプレイガイドと提携しまして、その半分はインターネット、am/pmで予約販売できるようにしました。年間64日競馬をやっていますが、特別観覧席が満員になるのが6日か7日くらいです。その日は立ち見も入ります。立ち見といっても料金1,500円、2,000円を取って立ち見になっているのですが、そういう日は6日か7日しかありません。ではなぜこんなことをやったのかというと、CNプレイガイドと提携することによって、CNプレイガイドのホームページにちゃんとバナーがでます。ですから宝塚歌劇の上に川崎競馬場というバナーが出ています、大井競馬と並んで。

昔、京浜工業地帯の労働者を集めて、それから日進町というドヤ街もありますが、今日も場内にはドヤのおじさんたちもいっぱいいたと思いますが、「ああいう人たちがいるのが競馬場だ」ってい

う印象を払拭（ふっしょく）しないと、新しいファンが獲得できません。新しいファンを獲得するためにもCNと提携したわけです。

それからカツマル君カードというポイントカードを作っていて、最初は某大手レンタルショップのポイントと組もうとしていたのですが、現場サイドは全部OKだったのですが、取締役会の「博打とは組まねえ」という一言があり、なくなりました。提携できたのはヤマダ電機です。ヤマダ電機のポイントとはイーブンで交換できます。ヤマダ電機はすぐそこにあるので、そこの相乗効果を狙ってしまっていて、だいたい2,000人くらいが会員になっています。その人たちは、競馬場に来るとカツマルポイント10ポイント、ヤマダポイントが50ポイントたまるという、そんなしかけをやっています。

36億円あった累積赤字を、平成22年に半分にするという経営改善計画をつくったのですが、この3月までで9億円まで小さくできました。収益が単年度で9億円だしていますから、あともうちょっとで累積赤字が解消できます。そうすると本来の目的である、神奈川県と川崎市にここの収益から1億円とか2億円とか繰り出しができるようになります。なんとかそこまで数年のうちにもっていききたいというのが我々の仕事です。

競馬経営の目的は、地方財政の振興に寄与するというのももちろんですけど、その他の目的としては、健全なレジャーの提供と馬事振興、馬の文化そのものの振興とがされています。かつては馬というのは生産手段であり輸送の手段であり、兵器でもあった。かつての日本の戦国時代に、何が戦いを制したかという、鉄砲以前はどれだけ馬を持っていたかで勝負が決まっていました。第二次世界大戦までは、大砲を引っ張っていたのは全部馬です。その馬はすぐ横で大砲を鳴らしてもびくとも動かない馬をつくらないと大砲を引っ張れないです。だからそういう訓練をやってきたそうです。近衛師団の騎馬隊の馬というのは、頭を上げたままで、頭を動かさずに1時間立っていられたそうです。その話は別にして、今は乗馬か競走馬しか残っていませんので、日本を支えてきた馬事文化を守る意味もあります。

あと私が非常に気にしているのは、こうした公の施設というのは、ここにくるお客さんを満足させるだけでは経営を維持できません。普通、映画館とかデパートというのは、入ってくるお客さんが顧客ですから、CS、顧客満足度調査をやって、お客さんのよかった、満足だということを確認して経営していきます。一方、公の施設は、ここを使わない人たちも、ここの存在を認めてくれないとつぶされてしまう。つまり、競馬場なんて迷惑施設だ、こんなもの無い方が良く、ここを公園にしてもらった方がもっと良く川崎市民が思い始めたら、ここは存立できない。体育館や運動場でも同じことが言えます。公の施設は、利用者だけのCSでは維持できない。最近になって、施設管理をしている人間がそのことを意識し始めた所です。この競馬場の内馬場の子供たちの遊び場に来てもらうのは歓迎だし、年に2回ぐらいはオープンデーを設けて自由に入ってもらって、仮面ライダーショーをやったりポニー乗馬をやったり歌謡ショーをやったりということに取り組んでいます。世界一の映像装置を作りましたので、これもひとつには顧客満足度のためですけど、これを住民の方たちにも自慢にしてもらいたい。「川崎にも世界一があるぞ」と。年に何回かは「崖の上のポニョ」でも子供たちに見せたいなと思っています。それで周りの住民にも、変なおじさんたちも来るけれど、あの芝生の上で遊べるのもあるしなあって思ってもらえることは極めて重要なことです。

私の説明は以上です。

3. 川崎競馬場の現在の取り組みについて

鈴木：インターネットと電話での売り上げは伸びていると思うのですが、場内の売り上げというのは今どのくらいですか？

茅野：ひどい状態ですね。36%ぐらいがインターネットです。電話はほとんどありません。場内は18%を切りました。1～2年前まではインターネットと場内の売上げがほぼ同じだったんですが、どんどん変わってきています。中央競馬もインターネット販売が4割ぐらいになってきていますので、うちも数年のうちにインターネットの売上げが4割ぐらいになるだろうといわれています。だから場内をコンフォタブルにするだけじゃなくて、インターネットのお客さんにどうロイヤリティをもってもらおうかっていう取り組みをやらなきゃいけないってことで、昨年10月に独自のサイトを構築しました。他の競馬場と差別化を図りながら川崎競馬の雑ネタ帳といった小ネタを出しながら、場内にも足を運びながら一体感をもってもらい「どうせやるなら川崎の方が面白いぜ」という状態をつくりたいと思っています。行くときにはインターネットで座席が取れるようにしました。場内のトイレも女性のトイレもかなりきれいにしました。デパート並みとは言いませんが、スーパー並みにはきれいにしました。彼女を連れていくにも「席はとれている」というと連れて行きやすいのではと思います。そんな狙いがあります。

実は、デート雑誌にも広告を出しています、もちろん無料の持ち込みですが。若い層が、「競馬も結構面白いじゃん」「ここにきて100円払って面白い」。それが男同士だけでなく、彼女と来ても面白いとなってほしいです。彼女にもええかっこいいで「席を2つ予約しているから行かない」っていえば来るかもしれない。いずれにしてもこれからはインターネット中心になります。

全国を見ますと、馬産地の北海道が、旭川の競馬場を去年やめました。門別という馬産地の真ん中の800人しかスタンドがないところのナイター設備を整えて、競馬場をそこ1本にしぼりました。インターネットの売上げを頼りにして、われわれ南関東4場と組んでいます。実はSPAT4というのはSouthの4場という意味ですが、それに北海道も入って実は5場なのです。今日も最初に、スクランブルナイトという企画で、北海道の門別競馬提供のバッグを配ったのもそうした提携の一つです。川崎と相互に売り合うという。30分間隔広げて、間に門別のレースを入れて、お互いに売り合いをするというのをやっています。あそこのでかいビジョンでそれぞれレースを見せながら、その券売機でA場、B場のところに印をつければ買えるようになってます。

川崎の売上げの5割近くが、全国の地方競馬場などが運営する場外売り場の売上げです。北海道から佐賀まで全国で売ってます。南関東の競馬はよく売れるので売ってくれています。昼間は自分の競馬場の馬券を売って、夜はそのままりレー発売ということで、川崎の馬券を売ってもらっています。

鈴木：何%かとられているのですか？

茅野：一般的に、場外の販売には、概ね売上げの15%を払っています。コスト抜きにすれば10%はこちらに入ってきます。

鈴木：川崎競馬場だけでなく、競輪や競艇もこういう状態は多いですよ。今おっしゃる努力をしていかないと苦しいのではないのでしょうか？

茅野：苦しいです。経営の厳しい地方競馬場では、たとえば1着賞金が10万円の競馬場もあります。10万円の賞金では馬はどうやって食べているんだろうと心配になります。馬の頭数が少なくなってきたから毎週1レースは必ず出ていて、毎週出るということは、追い切りという練習ができない。毎週、試合が練習という状態になってしまっているのではないかとされています。

北海道を中心に競走馬の生産牧場があって、年間1万数千頭の競走馬などの軽種馬を生産して、そのうちの上の方の3,000頭位が中央競馬に行って、残りが地方競馬23場に入っていたのが、7場つ

ぶれてしまって2,000頭くらいの競走馬の行き場がなくなって、それが生産頭数減につながっています。当然すそ野が縮まればスター馬は出てきません。地方競馬場を廃場させてしまうなんて、JRA（中央競馬会）にしても農水省にしても、失策をしたなど今頃は思っているのではないかと期待していますが、これ以上競馬場を潰すことは競走馬を減らすことになります。

参加者：地方で走ったジョッキーさんは中央で乗れないというのを一気に通貫にするという構想はないのですか？

茅野：地方と中央の交流レースは始まっています。JRA交流レースということをやっています。明日は3レースやります。中央から15頭ぐらい、1レース5頭ぐらいきます。そうすると中央のファンが馬券を買ってくれますし、中央のジョッキーも乗りにきます。それから新馬戦の中に認定新馬戦というのがあります。JRAから補助金をもらっているのですが、そこで勝った馬は中央での出走権をもらえます。そのときには地方のジョッキーを連れていけることになります。

あの有名な武豊という騎手は、中央競馬育ちで勝利数が1位ですが、それに続く勝利数2位から4位の騎手は、実は地方競馬出身者たちなのです。地方はレースの数は多いし、トラックの大きさも小さいし、特に南関東あたりは、毎回実質のオールスターレースをやっていますので。自場競馬という考え方では、本来は自場の騎手だけで競馬をやればいいんですが、南関東に所属していれば南関東のどこにでも乗りに行けますので、馬主さんはこれぞと思う騎手に騎乗を頼むので、メインレースなどのいいレースになると、南関東上位の騎手ばかりでレースをするようになってしまっています。南関東には80人近く騎手がいますが、上の20人が南関東どの競馬場に行っても乗っているみたいになっています。そのかわり新人が入ってきて、上にあがっていくのが難しい。ファンにしてみれば見やすくわかりやすい。

なお、少し前まで南関東4場も、開催日割りを巡って、浦和が正月開催しているときに川崎が開催をぶつけてみたりと争っていたのですが、これだと共倒れになってしまうので、平成17年くらいから話し合いをして、18年、19年にかけて日程を完全に分離しました。南関東4場は、中央競馬がない日を4場で分けあって日程が重ならないようにしている。そして例えば川崎が開催するときには他の3競馬場は川崎の馬券を場外売り場として売っている。この体制ができてこれからは4場のどこが欠けても、4場のどこもやっていけなくなると思います。

中塚：茅野さんは3年ぐらい前までは神奈川県のスポート課長をされていたわけですね。一部事務組合として神奈川県から出向されている形なのですか？ 県のローテーションの一つとしてここが位置付けられているということですか？

茅野：そうです。

もともとここは県の直営競馬場で、県の出先機関でした。ここで競馬と競輪の両方を経営していたのです。さきほど、かつては県営競馬、市営競馬であると言いましたが、具体的には神奈川県職員がここを使って川崎市営競馬を運営し、収益を川崎市に入れていたのです。当時の入口には看板があって、第何回県営競馬というのと第何回市営競馬というのと開催ごとに書き換えしました。それが一部事務組合になってからは、全て組合営競馬となり、そういう看板もなくなりました。

28人の常勤職員と言いましたが、22人までが県からの派遣で、5名が川崎市からの派遣です。あと1名は他の団体からの派遣です。地方競馬で全部県や市からの派遣職員で運営しているのは川崎競馬ぐらいで、たいていは競馬場採用の職員を持っています。しかし川崎はずっと県や市からの派遣職員です。大井競馬は東京23区でやっていますが、いわば24番目の区が、特別区競馬組合という自治体となります。23区の採用試験をうけると競馬に来ないかと声がかかるようです。23区合同の

採用試験の24番目の採用リストに入っています。あるいは大井の競馬組合と23区との交流人事の中でもう帰らないと残った人もいます。川崎競馬には獣医が3人いますが、県はもともと獣医を必要とする現場を持っていますので、そこから獣医を引っ張ってきています。

阿部：ここに厩舎はありますか？

茅野：厩舎は、ここから離れて3kmくらいの小向というところに厩舎地区があり、680ぐらいの馬房があります。その隣の多摩川河川敷に、国交省の占用許可を得て練習馬場を作っています。厩舎には、今は少し少なくなって500頭ぐらい入っています。そこからここへレースの2時間前ぐらいになると運ばれてきます。レースをやって、クールダウンをやって、ドーピング検査があるので上位3頭とその下2頭、各レース5頭はドーピング検査を受けます。50分以内でおしっこがでないとか採血されて、それが終わると厩舎に帰れます。

質問：大井に比べると臭いにおいがしないです。ところでレースの命名権はどうなっていますか？

茅野：地方競馬の何ヶ所かでは数万円くらいで売っているの、「茅野英一生誕50周年記念特別」というのもやってくれます。

一同：笑

茅野：川崎はそれはやっていませんし、違う売り方をしたいと思っています。たとえば今回も「藤沢宿特別」というのをやっています。実は県営競馬の収益のほとんどは県内の市町村振興に使ってきました。経営の苦しさが少し落ち着いてきたところで、もう一回市町村とタイアップしようじゃないか、市町村の観光アピールと提携しようじゃないかということで、去年から始めたのが東海道53次シリーズです。箱根宿から川崎宿まで、ナイター開催の最終日を盛り上げる企画ということで、地域の名前をつけながらやっています。最後に11月に川崎宿で終わるというシリーズです。今年からシリーズポイントというものつくって作っていて、シリーズ1位の騎手と調教師には賞金を出しています。

今日は藤沢宿にちなんだレース名をつけています。今日の特別レースは、湘南江ノ島海の女王杯、湘南江ノ島海の王子杯、そして藤沢宿特別の3レースが特別レースですが、これをスポーツ新聞で見ると、川崎競馬面のレース名が湘南〇〇、湘南〇〇、藤沢宿と全て藤沢関連のレース名で埋まるようになっています。大磯宿特別のときには高麗山特別とか、箱根のときには芦ノ湖特別とか、ご当地名をつけています。そういうレース名の使い方の方が、県民にとって、ファンにとってわかりやすくいいかなと思って、ネーミングライツを売るということは今のところ考えていません。

今日はミス江ノ島が3人、ミスター江ノ島が3人、来てくれていまして、自動車レースのようなラウンドガール、パドックでレース番号のボードを持ってもらっています。先日は平塚宿特別だったので平塚七夕おり姫に来てもらい、プレゼンターもやってもらいました。

そうこうしているうちにレースが進んでいます。いよいよお楽しみの方へ。

参加者：馬券の買い方を教えてください。実は買ったことがないので。t o t oは買ったことがありますけど。

茅野：馬券の種類、賭式は、9種類ありますが、簡単な3種類を説明します。まずは単勝、これは1着をあてるという一番基本で簡単なものです。複勝は、3着までにはいる馬を当てるものです。3

着までですから、当然当たりやくなりますが、その配当が低いです。したがって単勝、複勝は、配当が高くないので、何種類もの馬を買ってしまうと、当たっても配当が購入金額に届かず、結局損します。ですから、単勝、複勝を買うなら、選ぶのは1レースに1頭にするのが基本です。繰り返すと、複勝は3着までであればOKなので当たりやすい。8頭しか出ていないときは8分の3の確率ですが、でも配当は少ない。初心者の方にお勧めは、ワイドです。3着以内に入る2頭を2頭とも当ててくれるものです。3着以内の2頭を当てるので、3着以内の1頭を当てて複勝より当然難しくなりますが、その分、配当も高くなります。一般的には倍率が2倍から7倍くらいまでいきますので楽しめます。

～参加者がそれぞれ話を聞きながら買い方を真剣に考えている～

茅野：地方競馬は厩舎間の格差が激しいです。勝ちの多い厩舎の馬は強いです。それから強い馬の馬主さんほど良い騎手を乗せたがるので、勝ち鞍の多い騎手が乗っている馬も有力です。騎手の格差も激しいです。厩舎で見る、ジョッキーで見るというのも買い方のひとつです。それでは、馬券を買ってみてください。どうもありがとうございました。

4. 参加者のコメント

◆牛木素吉郎

A. 競馬場について

20 数年ぶりに競馬場を見て大きく変わっているのに驚いた。

- ・施設が、見違えるように立派で清潔になっている。特別観覧席、内側の芝生広場の遊園地、超大型ビジョンなど、競馬自体を含めて総合的なレジャー施設として使える。
- ・お客さんの質が変わっている。身なりがよくなり、行動にも落ち着きがある。国民全体の生活水準が向上したためもあるだろうが、女性や家族連れもいて客層も変わってきたのではないかな？
- ・コンピューター化の影響が非常に大きいことを実感した。馬券売り場の混雑が緩和され群衆（モブ）が、1ヶ所に集まる弊害は、少なくなったのではないかな？

B. 地方競馬の存在意義

地方競馬の存在意義を見出すのは難しいように思った。

- ・馬匹改良の名目は、まったく成り立たないだろう。
- ・市や県への財政的貢献も、大きな期待はできないようだし、地方自治体の財政が競馬、競輪に依存しなければならぬ時代は終わっている。
- ・馬事振興、競馬文化の保存・継承だけなら中央競馬で十分。
- ・競馬をふくんだ市民の総合的レジャーセンターとして運営できれば、それなりの意義はある。

C. ギャンブルとしての競馬体験と感想

1レースについて、1,000～2,000円程度の配当が予想される連勝馬券の1点買いを1,000円（10枚）ずつして、1度も的中しなかった。しかし、競馬を見る楽しみは、現場で馬券を買うことによって、いっそう十分に味わえた。ギャンブルの娯楽として良さと習慣性の弊害については、もう少し考えてみたいと思った。

- ・インターネット販売が将来にわたって、トトや宝くじと棲み分けしていけるだろうかという問題がある。
- ・インターネット販売が主力になると、資金調達の手段としては、多額の経費をかけて生き物の馬を実際に走らせることの必要性が疑問になる。コンピューター上で競争させてもいいことになる。
- ・競馬のように比較的配当倍率が低く的中率が高い（射幸性が低い）ギャンブルは習慣性（依存性）

を生みやすい（トトや宝くじは射倖性が高い）。

- ・平日開催で、他競馬場のレースも含めて、毎日、何レースもネット上で簡便に買うことのできるシステムは、習慣性の弊害を大きくするのではないか？

D. 「緑のレジャーランド」に（シロート考の結論）

競馬を公的資金調達的手段としてではなく、一つの文化として、また市民の健全な娯楽として存続させたい。

- ・競馬場を市民のための「緑のレジャーランド」として運営できないか？
- ・開催日には、競馬を中心に楽しむ場とする。実際のレースを見て楽しむとともに、社交（触れ合い）の場となるような企画を考える。
- ・開催日以外は、いろいろなレジャーの場として市民に開放する。レースに支障のある球技等もこの日は行える。平日は主婦、子ども、高齢者を対象の企画を考える。
- ・馬券売り上げの利益は、もっぱら競馬と「緑のレジャーランド」の設備投資と運営に当てる。他の公的資金として提供する必要はない。
- ・法改正などの必要があるだろうが、公的ギャンブルのあり方を根本的に考え直さないと、いずれは衰退の一途だろう。

◆依藤正次

競馬場へ行ったのは本当に久しぶりです、ギャンブルというとちょっと毛嫌いするかたもいるかもしれませんが、世間のしがらみから開放されて純粋に頭を使って馬券を買うという行為は素敵なことだと思う。また川崎競馬場内での時間の流れが心地よくて、ちょっとした小旅行に出た気分でした。実はこれから北海道へ行くのですが帯広でばんえい競馬を旅打ちしてきます。

◆嶋崎雅規

入場してすぐ目の当たりにしたのは、目の前を競走馬が駆け抜けていく姿。当たり前のことだが、なんて早いんだろうと改めて実感させられた。馬が疾走する、その迫力や美しさに、素直に感動を覚えた。

初めて来た川崎競馬場は、予想していたよりもずっときれいな印象を受けた。公営ギャンブルと言えば、平日から労務者風のオッサンたちが酒臭い息でもさせながら集う場所ぐらいに考えていた。そのイメージは間違っていた。きれいなガラス張りのスタンド、巨大なビジョン、カクテル光線、内馬場の青々とした芝生、どれも自分のイメージとは違っていた。

ほど良い間隔で行われるレースに、ビール片手に興じる心地よさ。これってクセになる人が多いのもうなずける気がした。とにかく掛け値なしに楽しめた一夜であった。

売店のおばちゃん、自慢のコロッケホントにおいしかったよ。

◆中塚義実

「8月例会」と称して行われた「お出かけサロンー川崎競馬体験ツアー」はとてもおもしろいものでした。これまで競馬には縁がなく、競馬場へ入るのも馬券を買うのも初めてだった私には、新鮮な驚きの連続で、新たな発見がたくさんありました。「勝ち負け」はともかく（まあそれも含めてですが）、参加者は皆それぞれに充実した6時間+αを楽しみました。

以上